

国際仏教学大学院大学研究紀要
第 25 号 (令和 3 年)

Journal of the International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Vol. XXV, 2021

〈大般涅槃經〉文字品の梵文断片について

幅 田 裕 美

〈大般涅槃經〉文字品の梵文断片について

幅田 裕美

1. はじめに

〈大般涅槃經〉¹のサンスクリット語原典は断片のみが伝えられているが²、法顕訳の分品で「文字品」に相当する断片が 2018 年に Gudrun Melzer により比定された。本稿ではその断片について紹介したい。

インドのアルファベット文字にそれぞれキーワードを挙げて、仏教の教えの要点を説明する段落は、Lalitavistara などの仏伝文献をはじめ、般若経典などの大乘文献に広くみられ、「字門」として知られている³。そこで用いられるアルファベットには二種類があり、現在のサンスクリット語辞典にみられるような母音に始まり子音を調音点によって配列したもの(a, ā, i, ī, u, ū ... ka, kha, ga, gha, ṅa ...)と、ガンダーラ語で用いられたもの(a, ra, pa, ca, na ...)とである。後者はその最初の 5 文字から Arapacana 字音表と呼ばれ、近年のガンダーラ語資料の研究によりその詳細が明らかになっている⁴。〈大般涅槃經〉にあらわれる字門は、前者の音韻配列によるアルファベットに属し、チベット語訳と両漢訳ともその配列に異同

¹ 本稿では、曇無讖訳『大般涅槃經』（『大正蔵』第 12 卷 No. 374）、法顕訳『大般泥洹經』（『大正蔵』第 12 卷 No. 376）、Jinamitra, Jñānagarbha, Devacandra によるチベット語訳 phags pa yongs su mya ngan las 'das pa chen po theg pa chen po'i mdo（テキストは Habata [2013]の校訂版を参照）およびサンスクリット断片 Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra の総称として〈大般涅槃經〉の表記を用いる。

² 本稿執筆の時点で、30 葉に属する 42 断片が知られている。詳細は Habata [2019] pp. 85–88 参照。

³ 山田 [1931]に字門を説く仏典が集められている。Lalitavistara のサンスクリット語テキストおよび漢訳に現れる字門については Brough [1977]参照。

⁴ Arapacana 字音表のガンダーラ起源説については Salomon [1990]を参照。Arapacana 字音表に基づくガンダーラ語の韻文テキストについては Melzer [2020]を参照。

はない。それぞれの文字のキーワードを諸訳から復元することは困難を極めていたが⁵、サンスクリット断片が比定されたことにより、その内容の一部が明らかとなった。

比定された断片はロンドンの British Library の Hoernle コレクションに含まれているもので、断片番号は Or. 15008/43 である⁶。松田和信が〈大般涅槃經〉の中央アジア出土断片をロンドンの Hoernle および Stein コレクションに発見した際に、断片は A, B, C の三写本に分類されたが⁷、本断片は写本 A に属する。この三写本は Stein コレクションの断片の出土地から、Khotan 東方の Khādalik の遺跡からもたらされたものであることが判明している⁸。断片の損傷は激しく、文字の読み取りは容易ではない。フォリオ番号も微かにインク跡が残るのみだが、恐らく 141 と読めるかもしれない。筆者は〈大般涅槃經〉のサンスクリット断片を総合的に研究する便宜上、テキストの内容に沿って断片に通し番号を SF 1 から SF 24 まで与え、Habata [2007] で研究成果の一部を出版した。その後比定された断片にはテキストの位置に応じて補助記号を添えることとしているが、本断片は SF 18a として扱う⁹。recto の 1 行目は文字 jha の説明で始まり、verso の 7 行目に文字 sa で終わっている。チベット語訳は Habata [2013] § 427.7-432.6 に対応し、曇無讖訳 ChinD 413c10-414a12、法顕訳 ChinF 888b16-c10 に対応する。

テキストの転写と復元に用いる記号および略号

- () 断片の失われた文字の復元
- [] 破損して読みの不確実な文字
- { } 断片にあるが削除すべき文字

⁵ 2008 年に Stanford Center for Buddhist Studies で開催された Nirvāṇa Sūtra Workshop において〈大般涅槃經〉の「文字品」の諸訳が参加者によって議論され、その成果は曇無讖訳の英訳 Blum [2013] に反映されている。

⁶ BLSF III, p. 221 に Klaus Wille による transliteration が公表されている。

⁷ 松田 [1988] p. 18.

⁸ 詳細については Habata [2007] pp. xxvii-xxx 参照。

⁹ テキストおよびドイツ語訳注は Habata [2019] pp. 144-148 参照。

<>	断片にないが補うべき文字
+	失われた文字
..	判読不能文字
.	判読不能の文字要素
///	写本の破れ目
<^>	写本には書かれない Avagraha
*	Virāma
;	写本に点で書かれた句読点
:	句読点として用いられた Visarga
○	とじ穴
r	recto
v	verso

2. ローマ字転写

recto

(r1) + .. [nā]śay[i]tavy[ā] .. tasmāt* jha .. ity [u] .. [te] ; ña[h] i[ti] ///

(r2) iva [k]. ci[t*] jambudvīpe asamaṃ kāyaṃ darśayā[m]i [: tathā]gata[h]
tasmāt* .. [i] ///

(r3) [va] saṃpūrṇa[h] tasmāt* tha i [;] .. iti [ḍ]. [h]. raḥ saṃgha [i]ty artha[h]
naiva] n. makṣyati .. ///

(r4) rtha .. [gurū]ṇām akṛta[j]ñ. ta[s]. + ⊕ + [it]i [;] .. [i]ti ; [a] ///

(r5) [i] .. sarvbahayapatana .. ///

(r6) tha iti [mahāyā] .. [vī] .[y] .. ///

(r7) naga .[e] ///

verso

(v1) tas[m]ā ///

(v2) [sī]m. . . . [iti] ; ba ///

(v3) ... [rakā] .. [o]dhisatvā ity ///

(v4) ti ; ya [i]ti ca[tvā] .[i] k]. ... [ṛ] ⊕ + + + + + .. .m(ā)t ///

(v5) [tasmāt*] ra iti ; la it. ㊦ śrāva]ka[y]ā[n]e [bhi]r[ā]ma[m] calena na
bhavitavyaṃ ārabdhavy. ///

(v6) [rv].. [lo] .. [vi]dyāmaṃtr[ā] bodhi .. tvabhā[ṣ]itā tasm[ā]t* va i[ti ;] śa iti ;
t[r]iśalyavigamārthaḥ ta[s] ///

(v7) ++ hāsūtraṃ śrūtṵ sarvbaśr[uto bhavati] .[ai] .. ly[ā] tasmā ṣa iti ; sa i .[i] ///

3. 復元と訳注

以下にセクション番号をつけて、テキストの復元、和訳および解説を試みたい。尚、Anusvāra と Visarga の脱落¹⁰は特に注記しない。

18a.1 (MPM § 427)

(r1) +.. [nā]śay[i]tavy[ā] (;) tasmāt* jha(h) ity [u](cya)[te] ; ña[h] i[ti] // (ca
21 akṣaras) ///

(全ての煩惱はすぐに) 滅するべきである。したがってjhaと言われる。ña
と言うのは…

(1) 断片にはjhaとñaのキーワードは残っていない。チベット語訳shes paと漢訳「智慧」(ChinD 413c11)および「智」(ChinF 888b18)によると、文字ñaにはñāna (jñāna)が想定される。文字jhaについては、チベット語訳がnyon mongs pa mams skyen par sprug par bya baと説明し、法顕訳の「一切煩惱燒令速滅」(ChinF 888b17)に対応する。恐らく、jhāpeti¹¹もしくはjhāṣayati¹²に関連する語形がキーワードとして想定される。

¹⁰ 写本における Anusvāra と Visarga の問題については Habata [2007] pp. lxxv–lxxvii 参照。

¹¹ PED s.v. jhāpeti 参照。

¹² BHSD s.v. jhāṣayati 参照。

18a.2 (MPM § 428)

(ṭa iti ; ṭa) (r2) iva [k](va)ci[t*] jambudvīpe asamam kāyaṃ darśayā[m]i [:
tathā]gata[h] tasmāt* (ṭa) [i](ty ucyate ; ṭha iti ;) /// (ca 13 akṣaras) /// (ṭha
ī)(r3)[va] sampūrṇa[h] tasmāt* ṭha i(ty ucyate) [:] (ḍa) iti [ḍ](a)[h](a)raḥ saṃgha
[i]ty artha[h] naiva) n(i)makṣyati (tasmāt* ḍa ity ucyate ; ḍha iti ;) ++ (ity
a)(r4)rtha(h) [gurū]ṇam akṛta[j]ñ(a) ta[s](māt* ḍhah) [it]i [:] (ṇa) [i]ti ; [a](nāriya)
/// (ca 19 akṣaras) ///

ṭa と言うのは、文字ṭaの（形の）ように私、如来は閻浮提のどこかに私の不均等な身体を現わす。したがってṭaと言われる。ṭha と言うのは、（法身という意味である。）文字ṭhaの（形の）ように完全である。したがってṭhaと言われる。ḍa と言うのは、教団は若々しいという意味である。衰えることは決してない。したがってḍaと言われる。ḍha と言うのは、（無恥）という意味である。尊敬すべき人々に対して恩知らずである。したがってḍhaと言われる。ṇa と言うのは、非聖（という意味である）…

(1) *asamaṃ kāyaṃ*] チベット語訳では *mtshungs pa med pa'i sku* (に対応し、漢訳は「半身」(ChinD 413c13)、「不具足」(ChinF 888b19)と訳す。ここでは文字ṭaの形をキーワードとして用いており、ブラーフミー文字のṭaは半円あるいは閉じていない円の形で書かれる¹³。もしかすると *sāmi*-「半分、不完全」が(a)samaṃ「不均等」と取り違えられた可能性も除外できない。この文字の形はAśoka碑文以来、変化なく書かれたため¹⁴、文字の形によって年代を限定することはできない。曇無讖が「喻如半月」(ChinD 413c13-14)と解説するのは誠に当を得たもので、この説明はその後、東アジアの悉曇の理解に受け継がれた。

(2) *darśayā[m]i*] この文の一人称の主語は如来である。

¹³ Sander [1968] Tafel I (Kuṣāṇa-Alphabete), 9 (Gupta-Alphabete), 29 (Turkistanische Alphabete)参照。

¹⁴ Bühler [1896] Tafel II-III 参照。

(3) (*ṭha iti ;*)] チベット語訳の *ṭha zhes bya ba ni chos kyi sku'i don te* に対応し、*ṭha iti ; dharmakāya ity arthaḥ* が想定される。

(4) (*ṭha i*)[*va*] *sampūrṇa*[*ḥ*]] ここでもブラーフミー文字 *ṭha* の形が円形であることをキーワードとして用いている¹⁵。

(5) (*ḍa*)[*ḥ*](*a*)*raḥ*] サンスクリット *dahara* 「若い」のプラークリット形が用いられている¹⁶。このキーワードを *naiva n(i)makṣyati* 「衰えることは決してない」と説明することから、ここでは「若い」という性質のポジティブな意味、生き生きとして活発に成長している状態を肯定的に表していることが明らかである。同じ「若い」を意味する *bāla* がネガティブな意味、経験が少なく愚かである性質を現わすのとは対照的である。曇無讖訳には「茶者は愚癡僧。不知常與無常。喩如小兒。是故名茶。」(ChinD 413c15-16)とあり、ネガティブな意味に解釈している。

(6) *n(i)makṣyati*] *nimamṣyati* の *Anusvāra* が脱落した形は SF 4.6 にも見られる¹⁷。

(7) 文字 *ḍha* のキーワードは断片に残っていない。チベット語訳 *ngo tsha mi shes pa* は法顕訳「不知慚恥」(ChinF 888b21-22)と一致し、曇無讖訳は「不知師恩。喩如羝羊」(ChinD 413c16-17)と解説する。これらは *mūḍha* 「混乱した、無知な」もしくは *meṇḍha* 「羊」を想起させるが、正確なキーワードの復元は不明である。

(8) [*a*](*nāriya*)] 文字 *ṇa* のキーワードの語頭の一文字のみ断片に残っているが、チベット語訳の *'phags pa ma yin pa* および漢訳の「非是聖」(ChinD 413c17)と「不正」(ChinF 888b22)に対応することから、*anārya* を意味する語が示唆される。ここでは文字 *ṇa* を含むプラークリット形の *aṇāriya*¹⁸ が想定される。

¹⁵ Sander [1968] Tafel I (Kuṣāṇa-Alphabete), 9 (Gupta-Alphabete), 29 (Turkistanische Alphabete); Bühler [1896] Tafel II-III 参照。

¹⁶ Pischel [1900] p. 160, § 222 参照。

¹⁷ Habata [2007] p. 23 参照。

¹⁸ Pischel [1900] p. 105, § 134 参照。

18a.3 (MPM § 429)

(ta) (r5) [i](ti) sarvbabhayapatana .. /// (ca 32 akṣaras) /// (tasmāt*) (r6) tha iti <da iti> [mahāyā](ne) [vī](r)[y](a) .. /// (ca 35 akṣaras) /// (r7) naga(r)[e] /// (ca 44 akṣaras) ///

taと言うのは、あらゆる危険に陥ることから（離れるという意味である。したがってtaと言う。thaと言うのは…）したがってthaと言われる。daと言うのは、大乘に於いて精進することを（喜ぶという意味である。したがってdaと言われる。dhaと言うのは…したがってdhaと言われる。naと言うのは三事¹⁹が）市街に於ける（城門の柱のように堅固であるという意味である。したがってnaと言われる。）

- (1) *sarvbabhayapatana*] 対応するチベット語訳srid pa thams cad du ltung baはsarvabhavapatanaを示唆し、法顕訳「一切有」(ChinF 888b23)もこれと一致する。しかし、曇無讖訳の「驚畏」(ChinD 413c19)は断片の-bhaya-と一致する。テキストの伝承過程でbhayaとbhavaが取り違えられた可能性が高い。文字taのキーワードはpatanaとみなされる。
- (2) (*tasmāt**) *tha iti*] 文字thaのキーワードは断片に残っていないが、チベット語訳と両漢訳とも一致して、ブラーフミー文字thaの形²⁰を蚕が繭に入っている状態に喩えていることは明らかである。
- (3) <da iti> [mahāyā](ne) [vī](r)[y](a) ..] これに続く破損箇所文字daのキーワードが失われているが、チベット語訳theg pa chen po la brtson par bya ba la dga bar gyis shig paと法顕訳「於摩訶衍歡喜方便」(ChinF 888b25)によると、語根nand「喜ぶ」の何らかの形が想定される。例えば、nandaで命令形、あるいはnanda-の名詞形が可能性として考えられる。曇無讖訳は「大施」(ChinD 413c21)を挙げ、dānaをキーワードとして示唆する。

¹⁹ MPM においては仏・法・僧の三宝を「三事」gzi gsum, traivastuka-と呼ぶ。

²⁰ Sander [1968] Tafel I (Kuṣāṇa-Alphabete), 9 (Gupta-Alphabete), 29 (Turkistanische Alphabete); Bühler [1896] Tafel II–III 参照。

- (4) 文字dhaに関する文章は全体が失われている。チベット語訳gzhi gsum ri rab bzhin du brtan zhing nub par mi 'gyur baおよび曇無讖訳「所謂三寶如須彌山高峻廣大無有傾倒」(ChinD 413c22–23)と法顯訳「護持三寶如須彌山不令沈没」(ChinF 888b26)とも一致した内容を示している。キーワードはチベット語のbrtan「堅固な」、漢訳の「護持」「無有傾倒」に対応する語が想定され、可能性としてdhruvaあるいは語根dhrの形が示唆される。
- (5) naga(r)[e]] 文字naのキーワードはnagaraと考えられる。

18a.4 (MPM § 430)

(v1) tas[m]ā(t* pa iti ; pha iti) /// (ca 37 akṣaras) /// (v2) [sī](dati tas)m(āt* pha [iti] ; ba (iti) /// (ca 33 akṣaras) /// (v3) ... [rakā] .. (b)[o]dhisatvā ity (arthah tasmāt* bha iti ; ma iti) /// (ca 18 akṣaras) /// (tasmāt* ma i)(v4)ti ;

...したがってpaと言われる。phaと言うのは…衰退する。したがってphaと言われる。baと言うのは…(したがってbaと言われる。bhaと言うのは、)菩薩は(正法の荷を担う者である)という意味である。したがってbhaと言われる。maと言うのは…したがってmaと言われる。

- (1) tas[m]ā(t* pa iti)] 文字paのキーワードは失われている。チベット語訳phyin ci logおよび両漢訳「顛倒」(ChinD 413c25; ChinF 888b28)によると、viparyāsaが想定される²¹。
- (2) [sī](dati)] 文字phaに関する説明には、チベット語訳の'jig paとnyams paおよび漢訳の「盡」(ChinD 413c27)と「敗」(ChinF 888b29–c1)に対応する語が用いられている。断片に母音記号-が残っていることから、可能性としてsīdatiあるいはkṣīyateが考えられる²²。後者のkṣīyateは文字幅の広いyaを含み、後続の(tas)m(āt*)までの間隔には合

²¹ phyin ci log が viparyāsa の訳であることは SF 8a.2 (Habata [2019] p. 106)参照。

²² sīdati が「衰退する」という意味で用いられることについては PW s.v. sad (3) 参照。

わない。文字phaのキーワードは、チベット語訳の'bras bu 'jig par byed paに対応するphalaが想定されるが、確実ではない。

(3) 文字baの説明は断片では失われている。チベット語訳de bzhin gshegs pa mams kyi stobs mamsおよび曇無讖訳「佛十力」(ChinD 413c28)と法顕訳「力」(ChinF 888c1)によると、キーワードはbalaが想定される。

(4) ... [rakā] ... 断片の損傷のため読みは確実ではない。チベット語訳dam pa'i chos kyi khur khyer baに対応する語、例えばsaddharma-bhārakāが想定されるが、断片の損傷が激しいため、確実な復元は困難である。

(5) 文字maの説明は断片に残っていない。チベット語訳chos lugsおよび漢訳「嚴峻制度」(ChinD 414a2)と「限」もしくは「法限」(ChinF 888c 3-4)に対応する語、例えばdamaがキーワードとして想定される。

18a.5 (MPM § 431)

ya [i]ti ca[tvā](r)[i k](araṇ)[ī](yāni)+++++(tas)m(ā)t(* ya iti ; ra iti) /// (ca 16 akṣaras) /// (v5) [tasmāt*] ra iti ; la it(i) [; śrāva]ka[y]ā[n]e <'>[bhi]rama[m] calena na bhavitavyaṃ ārabdhavy(am) /// (ca 7 akṣaras) /// (tasmāt* la iti ; va iti ; sa)(v6)[rv](ba)[lo](ka)[vi]dyāmaṃtr[ā] bodhi(sa)tvabhā[ś]itā tasm[ā]t* va i[ti ;] yaと言うのは、四つの為すべきこと（という意味である。）したがってyaと言われる。raと言うのは…したがってraと言われる。laと言うのは、声聞乘において喜び、動揺するべきではなく、（動揺しない大乘において）堅持すべきである（という意味である。）したがってlaと言われる。vaと言うのは、菩薩によって説かれた、あらゆる世界の学問と真言（という意味である。）したがってvaと言われる。

(1) ca[tvā](r)[i k](araṇ)[ī](yāni)+++++] チベット語訳don bzhi po mams byang chub sems dpas bya dgos pas naに対応する文面が、定型句のtasmāt ya itiの前に想定されるが、僅かに残された文字跡から、catvāri karaṇīyāni bodhisatvenaの復元が可能となる。「四つの為すべき

こと」とは、出家者が具足戒を受けた後に誓う古い規則 *catvāri karaṇīyāni* を指すと考えられ、例えば、Theravādin の *Vinaya* によると²³、*piṇḍiyālopabhojana* 「乞食で得た食事のみをとること」、*paṃsukūlacīvara* 「ぼろ布のみを衣とすること」、*rukkhamūlasenāsana* 「木の根元にのみ坐臥すること」、*pūtimuttābhesajja* 「薬として *pūtimutta* のみを用いること」である²⁴。この四つの *karaṇīya* は非常に古く厳しい誓約であり、あらゆる所有を放棄する厳格な内容であるが、仏教発展の相当古い時期に緩められたとみなされている²⁵。古い厳格主義はMPMにおいて重要な役割を果たしており²⁶、ここでキーワードとして用いられるのも不思議ではない。

(2) 文字 *ra* の説明は断片では失われている。チベット語訳 *'dod chags dang / zhe sdang dang / gtī mug gi 'jigs pa bsal bas de kho na nyid kyi chos la 'jug pas na* は両漢訳「能壞貪欲瞋恚愚癡說眞實法」(ChinD 414a5–6) および「滅婬怒癡入眞實法」(ChinF 888c5–6) と一致し、キーワードとしては *rāga* が想定される。

(3) *ārabdhavy(am)*] チベット語訳 *theg pa chen po mi g-yo ba nyid brtsam par bya ba* によると、*mahāyāna*-と *acala*-が断片の失われた箇所にあつたと考えられ、例えば *ārabdhavyam acalamahāyānam* が想定される。文字 *la* のキーワードは *cala* あるいは *acala* とみなされる。

(4) *(sa)[rv](ba)[lo](ka)[vi]dyāmaṅtr[ā]*] 文字 *va* のキーワードは *vidyā* とみなされる。曇無讖訳の「大法雨」(Chind 414a9) は *varṣa* を示唆するが、断片にも法頭訳にもこの語はない。

²³ Vin I 96.13–97.18 参照。

²⁴ von Hinüber [1999] pp. 41–45 参照。 *pūtimutta* の意味は不明である。

²⁵ von Hinüber [1999] p. 42 参照。

²⁶ Habata [2019] pp. 48–72 参照。

18a.6 (MPM § 432)

śa iti ; t[r]iśalyavigamārthaḥ ta[s](māt* śa iti ; śa iti) /// (ca 8 akṣaras) ///

(i)(v7)(dam ma)hāsūtram śrutvā sarvbaśr[uto bhavati] (v)[ai](tu)ly[ā] tasmā<t*>
śa iti ; sa i(t)[i] ///

śa と言うのは、三つの刺を抜き取るという意味である。したがってśaと
われる。śa と言うのは…この大経を聞いてから、（人は）すべてを聞いた
ことになる。（なぜならこの大経は）「方等」であるから。したがっ
てśaと言われる。sa と言うのは…

- (1) (v)[ai](tu)ly[ā]] ablativeのvaitulyātが次の語頭のt-の前でvaitulyāと
書かれているとみなされる。ここではvaitulyaの語の通俗語源解釈が
関与している可能性が考えられ、「他のあらゆるテキストを包括し
卓越している」と解される²⁷。この文の前に挙げられていた文字śaの
キーワードは失われているが、チベット語訳がyongs su rdzogs pa、曇
無讖訳が「具足」(ChinD 414a10)、法顕訳が「滿」(ChinF 888c9)を挙
げることから、例えばpariniṣpannaあるいはpariniṣpattiが想定される。
(2) 文字saの説明が始まるところで断片は終わる。チベット語訳dam
pa'i chosおよび両漢訳「正法」(ChinD 414a12–13; ChinF 888c10–11)に
よると、キーワードにはsaddharmaが想定される。

4. 各文字のキーワード

以上の復元から明らかになったキーワードを列挙すると次のようにな
る。断片の損傷のためにキーワードが失われていて、諸訳から想定され
る場合は*[]で示す。

jha	*[jhāpeti/ jhāṣayati]
ñā	*[ñāna/ jñāna]
ṭa	ṭa iva (文字の形)

²⁷ vaitulya の意味については Karashima [2015] pp. 132–138 参照。MPM におけ
る vaitulya の意味については Habata [2007] pp. xlix–li 参照。

ṭha	ṭha iva (文字の形)
ḍa	ḍahara
ḍha	*[mūḍha]
ṇa	aṇāriya
ta	patana
tha	*[文字の形]
da	*[nanda]
dha	*[dhruva]
na	nagara
pa	*[viparyāsa]
pha	*[phala]
ba	*[bala]
bha	*[bhārakā]
ma	*[dama]
ya	[k](araṇ)ī(yāni)
ra	*[rāga]
la	cala/acala
va	vidyāmaṅtra
śa	triśalyavigama
ṣa	*[pariniṣpanna/ pariniṣpatti]
sa	*[saddharma]

以上のことから次のような特徴がみられる。第一に、必ずしもキーワードの語頭に当該の文字がくるとは限らないこと。これは、例えば *Lalitavistara* のキーワードが、語頭にくるのが難しい文字を除いて、基本的に語頭に当該の文字を用いているのとは異なっている²⁸。第二に、プラークリットの語形がみられるのは反舌音を含む語に特に顕著であること。反舌音のキーワードはチベット語訳や両漢訳からは想定が非常に困難だ

²⁸ *Lalitavistara*, ed. Lefmann [1902] 127.3–128.6; ed. 外薊 [1994] 528.19–530.22.

ったが、断片で損傷が激しいながらも復元できたのは幸いであった。第三に、文字 ta および tha の説明では明らかに文字の形をキーワードに用いていること。この文字の説明は明らかにブラーフミー文字の形を前提としていて、カローシュティー文字とは関連性がみられない。これは字門を説くテキスト、例えば般若經典が、Arapacanaアルファベットを基礎にしているのとは異なった成立背景を示唆する。第四に、他のテキストの字門を踏襲しない、独自のキーワードを用いている例が顕著なこと。それぞれの文字の説明は〈大般涅槃經〉の内容から選んでいる場合が多く、独創性を示していると言えよう。

略号

BHSD: Franklin Edgerton: *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*. Vol. II: Dictionary. New Haven 1953.

BLSF: Karashima, S. & Wille, K. (vol. I–III) & Nagashima, J. (vol. III) (2006–15). *Buddhist Manuscripts from Central Asia. The British Library Sanskrit Fragments*. Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhism, vol. I, 2006; vol. II, 2009; vol. III, 2015.

ChinD: 曇無讖訳『大般涅槃經』（『大正蔵』第十二巻 No. 374）。

ChinF: 法顯訳『大般泥洹經』（『大正蔵』第十二巻 No. 376）。

MPM: Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra (チベット語訳テキストは Habata [2013]、サンスクリット断片テキストは Habata [2007][2019]参照、§で示される番号はチベット語訳と両漢訳を対照するためのセクション番号で対照表は Habata [2007][2013][2019]巻末に収録されている)。

PED: T. W. Rhys Davids/ William Stede: *The Pāli Text Society's Pāli-English Dictionary*. London 1921–25.

PW: Otto Böhtlingk/ Rudolph Roth: *Sanskrit-Wörterbuch*, St. Petersburg 1855–75.

SF: Sanskrit Fragment(s)

Vin: Vinayaṭīka, ed. Hermann Oldenberg, 5 vols. 1879–83 (reprint Pali Text Society).

参考文献

- Blum, Mark L. [2013]: *The Nirvana Sutra (Mahāparinirvāṇa-sūtra)*. vol I. (BDK English Tripiṭaka Series). Berkeley: Bukkyo Dendo Kyokai America.
- Brough, John [1977]: The Arapacana Syllabary in the Old Lalita-vistara. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 40. 1977, pp. 85–95 (in Collected Papers pp. 450–460).
- Bühler, Georg [1896]: *Indische Palaeographie. Von circa 350 a. Chr. – circa 1300 p. Chr.* (Grundriss der Indo-Arischen Philologie und Altertumskunde, Band 1, 11). Strassburg: Trübner.
- Habata, Hiromi [2007]: *Die zentralasiatischen Sanskrit-Fragmente des Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra. Kritische Ausgabe des Sanskrittextes und seiner tibetischen Übertragung im Vergleich mit den chinesischen Übersetzungen.* (Indica et Tibetica 51). Marburg: Indica et Tibetica Verlag.
- Habata, Hiromi [2013]: *A Critical Edition of the Tibetan Translation of the Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra.* (Contributions to Tibetan Studies 10). Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag.
- Habata, Hiromi [2019]: *Aufbau und Umstrukturierung des Mahāparinirvāṇasūtra. Untersuchungen zum Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra unter Berücksichtigung der Sanskrit-Fragmente.* (Monographien zur indischen Archäologie, Kunst und Philologie 25). Bremen: Hempen Verlag.
- Hinüber, Oskar von [1999]: *Das Pātimokkhasutta der Theravādin. Seine Gestalt und seine Entstehungsgeschichte. Studien zur Literatur des Theravāda-Buddhismus II.* (Akademie der Wissenschaften und der Literatur, Mainz. Abhandlungen der geistes- und sozialwissenschaftlichen Klasse Jg. 1999. Nr. 6). Stuttgart: Steiner.
- 外園幸一 [1994]: 『ラリタヴィスタラの研究』上巻、東京（大東出版社）。
- Karashima, Seishi [2015]: Who Composed the Mahāyāna Scriptures? The Mahāsāṃghikas and Vaitulya Scriptures, in: *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University* 18. 2015, S. 113–162.

- Lefmann, S. [1902]: *Lalita Vistara*. Erster Teil: Text. Halle: Verlag der Buchhandlung des Waisenhauses (reprint Tokyo 1977).
- 松田和信 [1988]: 『インド省図書館所蔵 中央アジア出土大乘涅槃經梵文断簡集 — スタイン・ヘルンレ・コレクション』 (Sanskrit Fragments of the Mahāyāna Mahāparinirvāṇasūtra. A Study of the Central Asian Documents in the Stein/Hoernle Collection of the India Office Library, London). (Studia Tibetica 14). 東京 (東洋文庫)。
- Melzer, Gudrun [2020]: An Arapacana Acrostic Poem in Gandhari. Bajaur Collection Kharoṣṭhī Fragment 5. (München, July 2020, online: gandhara.indologie.uni-muenchen.de).
- Pischel, Richard [1900]: *Grammatik der Prakrit-Sprachen*. (Grundriss der Indo-Arischen Philologie und Altertumskunde. I. Band, 8. Heft). Straßburg (reprint Tokyo 1977).
- Salomon, Richard [1990]: New Evidence for a Gāndhārī Origin of the Arapacana Syllabary. *Journal of the American Oriental Society* 110, pp. 255–273.
- Sander, Lore [1968]: *Paläographisches zu den Sanskrithandschriften der Berliner Turfansammlung*. (Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland, Supplementband 8). Wiesbaden: Steiner.
- 山田龍城 [1931]: 「四十二字門に就て」『日本佛教學協會年報』3, pp. 201–267.

<キーワード>

大般涅槃經、文字品、梵文断片

Summary

A Sanskrit Fragment from the Section of the Syllabary in the *Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra*

Hiromi HABATA

The whole Sanskrit text of the *Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra* (MPM) is not transmitted to us. There are one fragment kept in Kōyasan and 41 fragments from Central Asia, most of which are kept in London or in St. Petersburg. One fragment in the Hoernle Collection in the British Library was identified as belonging to the MPM by Gudrun Melzer. The fragment has been given the signature Or. 15008/43. The fragment is strongly damaged, and it is difficult to make out. This paper deals with the transcription and the reconstruction of the text with its translation and commentary.

The text belongs to the section that deals with the Indian syllabary. The section is known as 文字品 *wén zì pǐn* (“chapter of letters”) according to the Chinese translation 大般泥洹經 *Dà bān ní huán jīng* (Taishō vol. 12, no. 376) of 法顯 *Fǎ xiǎn*. Among the known two systems of the Indian syllabary, *arapacana*-syllabary and *varṇamālā*-syllabary, the text of the fragment uses the latter system, and contains the part from the letter *jha* to *sa*. The explanation with key words on letters is often unique, for example, in using the forms of the Brāhmī letters, on which the Chinese translator Dharmakṣema 曇無讖 explained in comparison with the shapes of the moon for his Chinese audience of the 大般涅槃經 *Dà bān niè pán jīng* (Taishō vol. 12, no. 374). For the key words on the retroflex letters, the text uses often words from Prākṛit. Furthermore the text selects its key words from its own teaching in the MPM, and does not use the usual key words

known in other texts. It shows the originality of the text on the syllabary that is presented in the MPM.

*Professor,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*